沙石集　学習指導案

指導教諭 [redacted]
実習者 [redacted]

一、対象　第二学年Ａ組　男子二六名　女子一七名　計四三名
二、日時　令和元年六月十日(月)　六月十九日(水)
三、場所　二年Ａ組教室
四、単元名　説話　「沙石集　兼盛と忠見」　『改訂版　古典Ｂ古文編』　数研出版
五、単元について

（ア）教材観

本教材は鎌倉時代中期に無住道暁により編纂された仏教説話集である。一五〇話前後の説話が収録され、全十巻で構成されている。説経師に関わる話や、地方の武士や民衆の生活や心情に触れる説話なども多く収めている。

「兼盛と忠見」は「歌ゆゑに命失ふ事」という題で表記されることもある。舞台は歌合の場で、帝、貴族の文化を知ることができる。平兼盛、壬生忠見が左右に別れて和歌の詠みあいをし、負けた忠見は病に伏してしまう。それほどに強い忠見の歌合にかける思いなどを理解、共感することができれば高校生にも面白く読むことができる。作中には二つの和歌があり、共に「にけり」、係り結びの疑問などの既に学習した文法で構成されている部分がある。倒置法により文が逆転しているため起こる係り結びの逆接などの和歌独特の表現もある。

（イ）生徒観

特進アドバンスクラスである本クラスは、こちら側の問いかけに対してクラスの全員に答える力がある。また、本授業ではグループワークを中心に進行する。日頃からグループワークに慣れていることから、円滑な活動が見られ自分の意見や考えを見つけた後、発信することができる。助動詞は一通り理解しており、本単元にも出現する助詞の「に」や順接の確定条件の「已然形＋ば」なども扱っている。

（ウ）指導観

生徒たちは個人個人が高い能力を有している。また、グループワークを積極的に行うことができる。そのため、ヒントを出しすぎることは控える。しかし、今まで見たことがなく、教材である古文単語３１５などにも記載されていない単語や表現に苦労する場面も見られるためそういうものに対するヒントは机間巡視をしながら適宜提示する。また、すでに学習した内容も、完全な定着を目指すため多くの生徒を指名し答えてもらう。

六、単元の目標

これまで学習してきた知識を活用し、助動詞、助詞、敬語などの文法に注意してグループワークで協力し、現代語訳をする。また、当時の文化、背景を知ることで和歌を味わい、登場人物の心情の変化に気づく。

七、単元の評価基準

国語への関心・意欲・態度	・主語、述語を正しく理解し話の場面、流れを理解する。 ・百人一首に選ばれるほどの代表的な和歌である二首を味わう。 ・作者が兼盛、忠見についてどのような見方をしたかを考える。 ・グループワークを通して自らの考えを発信し、他者の考えを受容する。
読む能力	・敬語表現がどのように使われているかを理解する。 ・二つの和歌にある和歌ならではの表現に気づき、理解する。 ・主語が転換する場合と主語が継続される場合を見分け、誰が何をしたのかを正しく理解する。
言語についての知識・理解・技能	・地の文中と和歌中における助動詞の意味の違いを識別できる。 ・一つの単語の意味を深く正確に考えることができる。 ・漢字のもつ意味から言葉の意味を推測できる。 ・敬語の意味と誰から誰への敬意なのかを理解し識別ができる。

八、単元の指導計画

時	学習活動	指導上の留意点	評価基準
一	・『沙石集』の説明。 ・本文の音読をする。 ・p12L1「天徳の」からp12L3「思ひける」までを班ごとに現代語訳する。 ・先ほど訳した文章の答え合わせをする。	・日本三大説話集の作品、作者、成立年代を学習させる。 ・判読後、ペアで一度ずつ読ませる。 ・「歌合」「随身」などの語を先に説明し。机間巡視をしながら適宜ヒントを与える。 ・生徒を指名し、答えを言わせる。助動詞、敬語の重要表現は特に細かく扱う。	・『沙石集』とその周辺知識についての理解をしている。[知] ・歴史的仮名遣いに注意して読めている。[読] ・自分で回答を出せる。[技] ・班員と協力している。[態] ・こちら側の質問に答えようとする。[意]
二	・前回の復習をする。 ・本文の音読をする。 ・p12L4「恋すてふ」からp12L6「人の問ふまで」までを班ごとに現代語訳する。 ・先ほど訳した文章の答え合わせをする。	・p12L1「天徳の」からp12L3「思ひける」までの復習を口頭でする。 ・ペアで一度ずつ読ませる。 ・机間巡視をしながら適宜、和歌独特の表現に関するヒントを与える。 ・生徒を指名し、答えを言わせる。和歌中の助動詞、倒置法、句切れ、係り結びなどの重要表現は特に細かく扱う。	・歴史的仮名遣いに注意して読めている。[読] ・自分で回答を出せる。[技] ・班員と協力している。[態] ・こちら側の質問に答えようとする。[意] ・和歌を味わう。[関心]

時	学習活動	指導上の留意点	評価基準
三	・前回の復習をする。 本文の通読をする。 ・p12L7「判者ども」からp13L1「不食の病つきてけり」までを班ごとに現代語訳する。 ・先ほど訳した文章を答え合わせする。	・p12L4「恋すてふ」からp12L6「人の問ふまで」までを口頭で復習しながら重要表現に関しての質問をする。 ・ペアで一度ずつ読ませる。 ・机間巡視をしながら適宜、「天気」「多反」などの語に関するヒントを与える。 ・生徒を指名し、重要表現を掘り下げながら答え合わせをする。	・前回の内容を理解している。[知] ・歴史的仮名遣いに注意して読めている。[読] ・漢字から言葉の意味を推測できる。[技] ・こちら側の質問に答えようとする。[意] ・助動詞の重要表現を理解している。[知]
四	・前回の復習をする。 ・本文の通読をする。 ・残りの文を班ごとに現代語訳する。 ・先ほど訳した文を答え合わせしたあとまとめ。	・p12L7「判者ども」からp13L1「不食の病つきてけり」までを復習しながら重要表現に関する質問をする。 ・ペアで一度ずつ読ませる。 ・机間巡視をしながら適宜、意訳、敬語に関するヒントを与える。 ・生徒を指名し、重要表現を掘り下げながら答え合わせをする。 話の流れをつかませる。	・前回の内容を理解している。[知] ・歴史的仮名遣いに注意して読めている。[読] ・言葉の足りない部分を自分で捕捉できる[技] ・作者の考えを理解する。[読] ・こちら側の質問に答えようとする。[意] ・敬語の識別ができる。[技]

九、本時案（第四時）

（一）本時の目標…文章全体の流れを把握しながら歌合の勝敗が登場人物にどのような影響を与えたのかを捉え、作者がどのような考えを抱いたのかを理解する。

（二）本時の展開

時	学習内容	指導上の留意点と発問	評価基準と想定される回答
前回の復習5分	①ペアで本文の通読をする。 ②グループワークのため机を班の形に動かす。	①ペアで一度ずつ読ませ、その間机間巡視をする。	①歴史的仮名遣いに注意して読めている。［読］
本文の通読5分	①一、二時間目に現代語訳した所の内容を口頭で復習する。 ②前回現代語訳をしたp12L7「判者ども」からp13L1「不食の病つきてけり」の内容、文法事項を確認する。	①この後、忠見が兼盛の歌を褒める場面があるので、そのスムーズな理解のために兼盛、忠見が共にどちらの歌を詠んだのかを確認させる。 ②前述の①と同じ理由で判者たちがどのように歌合の決着を付けたのかを確認させる。確認するべき文法事項を発問 （ア）「已然形＋ば」の訳。（～と・～ところ・～ので） （イ）「未然形＋ば」の訳。（～ば・～ならば・～たら）	①これまでの現代語訳を通して内容を理解している。［読］ ②前回の内容を把握し、文法事項も確実に理解している。［技］ （ア）は完全に定着しているため正解が見込まれる。 （イ）は今回の授業で初めて確認する。何のことかわからない生徒がいる可能性があるため、ヒントとして仮定の意味をもつことを提示する。

時	学習内容	指導上の留意点と発問	評価基準と回答への対応
本文の現代語訳15分	①p13L1「頼みなき」～p13L6行目「侍るにや。」までを班ごとに現代語訳する。	①机間巡視をしながら適宜ヒントを与える。 ①「頼み」の訳には古文単語315も利用させる。 ①会話文中の「侍る」が誰から誰への敬意なのかを意識させる。 ①ここまでほぼなかった形容詞、形容動詞が多く出てき、それらは登場人物の心情を表すものが多くあるため詳しく扱う。	①言葉の足りない部分を自分で捕捉できる［技］ 作者の考えを理解する。［読］ 自ら答えを導き出せる。［技］ 班員に対して自らの意見を述べ他者の意見にも耳を傾ける。［意］
本文の現代語訳を答え合わせとまとめ25分	①先ほど訳した文章を答え合わせする。 ②重要な文法事項である敬語表現「侍り」「係り結びの結びの省略」などを学ぶ。	①生徒3人程度当て答え合わせをし、答えられない生徒には随時ヒントを与える。 ②「侍り」に関する発問 （ア）ここでの侍りは何語？ （イ）謙譲語の場合の意味は？ ③「係り結びの省略」に関する発問 （ア）「あはれにこそ」の文末には何が省略されているか。 （イ）「侍るにや」の文末には何が省略されているか。	①言葉の足りない部分を自分で捕捉できる［技］ ①こちら側の質問に答えようとする。［意］ ②敬語の識別ができる。［技］ （ア）尊敬、謙譲、丁寧のいずれかであることはわかっているため訳と文脈で考えさせる。 （イ）「候ふ」と同じ意味で元の単語は「仕ふ」であると提示する。 ③「係り結びの法則」の結びのルールを理解する。［理］ （ア）「に」がきたら「あり」が対応するパターンを定着させる。 （イ）「にや」がきたら「あらむ」が対応するパターンを定着させる。

時	まとめ　5　分
学習内容	①今までの学習内容の総復習。
指導上の留意点と発問	①和歌の才能が当時の人たちにとって「魅力」や「出世」のためなどに大きな役割を持っていたことの説明をする。 天徳の歌合は村上天皇の前で行われる一世一代の大舞台であったことを説明する。 その大舞台で敗北した忠見は死に至っるほど深く傷ついたことの確認をし、今も変わらない大きな何かをかけた勝負への想いに共感させ、古典への興味を駆り立たせる。
評価基準と回答への対応	①今までの学習内容を理解しているか。［理］

十、板書計画

沙石集　兼盛と忠見　無住

頼みなき由聞きて、兼盛、とぶらひければ、切る

回復の見込みがないということを聞いて、兼盛が見舞いに行ったところ

「別の病にあらず。御歌合のとき、名歌詠み出だ

「特別の病気ではありません。歌合の時に、素晴らしい歌を詠むことが

しておぼえ侍りしに、殿の『ものや思ふと人の問

できたと思われましたが、あなた様の『ものや思ふと人の問ふまで』、

ふまで』に、あはと思ひて、あさましくおぼえし

によって、ああと思って、情けなく思った時から

より、胸ふさがりて、かく重り侍りぬ。」と、つひ

胸が塞がり、このように病が重くなってしまいました。」と。とうとう

にみまかりにけり。

亡くなってしまった。

発問、ヒント

問1「頼みなき」の訳。

ヒ、古単には期待と記載。では何の期待が「なき」なのか。

問2「已然形＋ば」と「未然形＋ば」の訳。

ヒ、前者は「順接の確定条件」、後者は「順接の仮定条件」

問3「殿」は誰を指すか。

ヒ「殿」は二人称を示す。

『ものや～問ふまで』を詠んだのは誰か。

問4「あはと思ひ」は忠見が兼盛を褒めているのかけなしているのか。

ヒ「あは」は感服や衝撃を受けた時にいう言葉。

一段落で忠見は兼盛が自分の歌より良い歌を読むと微塵も思っていない。

十、板書計画

沙石集　兼盛と忠見　無住

執心こそ由なけれども、道を執する習ひ、あはれに

執着心を持つことは無駄であるけれども、歌道深く心にかける習慣は、しこそ。ともに、名歌にて『拾遺』に入りて侍るにや。

みじみと心ひかれる。両方とも素晴らしい和歌として、『拾遺和歌集』に入集しているとかいうことです。

発問、ヒント

問5、筆者は「執心」を持つことをどのように考えているか。

ヒ、「けれども」に注目させる。

ヒ、全体的に形容詞が増え、それが人物の理解につながることを提示する。

問6、「にこそ。」の下には何が省略されているか。

ヒ、「に」に注目させる。（「に」がきたら「あり」が対応するパターンを定着させる。）

問7、「侍るにや」の下には何が省略されているか。

ヒ、「にや」に注目させる。（「にや」がきたら「あらむ」が対応するパターンを定着させる。）